

ホセア書4-7章 「主を知らない民」

1A 民を教えない祭司 4

1B 真実と誠実の不在 1-10

2B 姦淫の霊 11-19

2A 主の裁き 5

1B 己の不義による躓き 1-7

2B アッシリヤの恐怖 8-15

3A 朝靄のような誠実 6

1B 三日目の立ち上がり 1-3

2B 誠実なきいけにえ 4-11

4A 陰謀の愚かさ 7

1B 謀略を重ねる家臣 1-7

2B 主から逃げ去る鳥 8-16

本文

ホセア書 4 章からです。午前礼拝でもお話ししましたが、ホセア書がこれほど、現代社会に生きる私たちに直接語りかけるものだとは思っていませんでした。前回私たちは 1 章から 3 章までを読みましたが、その歴史的背景を見ましたね。ヤロブアム二世の治世の中で、国がソロモン以上最も大きくなった時です。けれども、ヤロブアムの死後、急速に国が弱まってアッシリヤによって滅んでしまいました。神が憐れんでくださり、虐げられている彼らに豊かさをお与えになったのですが、彼ら自身はそうとは受けとめず、ますます物質主義と偶像礼拝の中に陥ってしまったのです。かつて、「繁栄という名の偶像」という本が出版されたことがあります。豊かな社会の中にある特有の問題、偶像礼拝があることを見てきています。

1A 民を教えない祭司 4

1 章から 3 章までは、ホセアがゴメルという姦淫の罪を繰り返す女を娶り、彼女が姦淫の限りを尽くし、娼婦、奴隷となっていたところを、彼が買い取るという話を読みました。預言者に与えられた主の命令は、まさにご自身とイスラエルとの関係を表していました。アブラハムに対して主が、独り子イサクを全焼のいけにえとして捧げなさいという命令が、愛する独り子を罪の供え物としてお捧げになった父なる神を表わしていたのと同じです。4 章からは、具体的にイスラエルの民がどのように神に背いていたのか、霊的な姦淫を犯していたのかを見ていきます。

1B 真実と誠実の不在 1-10

4:1 イスラエル人よ。主のことばを聞け。主はこの地に住む者と言い争われる。この地には真実

がなく、誠実がなく、神を知ることもないからだ。4:2 ただ、のろいと、欺きと、人殺しと、盗みと、姦通がはびこり、流血に流血が続いている。4:3 それゆえ、この地は喪に服し、ここに住む者はみな、野の獣、空の鳥とともに打ちしおれ、海の魚さえも絶え果てる。

イザヤ書でもそうでしたが、主はイスラエルの民に対して法廷に立たせるかのように訴えておられます。「主はこの地に住む者と言い争われる。」ということです。パウロがコリントの教会に対して、「もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。(1コリント 11:31)」と言いましたが、主の言葉によって、自分を有体に吟味するということが必要です。そして、「この地には真実がなく、誠実がなく、神を知ることもないからだ。」と主は言われます。真実というのはヘブル語でエメット、誠実はヘセドと言います。この二つをもって、神を知っているということになります。神を知っているというのは、真実や真理の中に生きているということであり、また、神に愛され、また人々に憐れみを示すという中に生きていることを意味しています。どんなに捧げ物をしていたとしても、その人の歩みにその特徴がないのであれば、彼は神を知らないということになるのです。

北イスラエルにある問題というのは、神についての知識が初めから誤っていた、的を外していたことにあります。ヤロブアム二世ではなく、初代の王ヤロブアム一世が行なったことを読んでみたいと思います。「1列王 12:26-28 ヤロブアムは心に思った。「今のままなら、この王国はダビデの家に戻るだろう。この民が、エルサレムにある主の宮でいけにえをささげるために上って行くことになっていれば、この民の心は、彼らの主君、ユダの王レハブアムに再び帰り、私を殺し、ユダの王レハブアムのもとに帰るだろう。」そこで、王は相談して、金の子牛を二つ造り、彼らに言った。「もう、エルサレムに上る必要はない。イスラエルよ。ここに、あなたをエジプトから連れ上ったあなたの神々がおられる。」主が選ばれた所はエルサレムであり、そこにある神殿でご自分を礼拝するように命じられていました。けれども、それは分裂した相手側、南ユダの国にあります。そこに行けば、北イスラエルの十部族がその心がユダに付いてしまうのではないかと危惧して、政治的な思惑から、イスラエルの北端にあるダンの町、そして南端のベテルにおいて、金の子牛を造らせました。そして、祭司はレビ族のアロンの末裔でなければいけないのに、勝手に祭司を選びました。確かに、彼らは主なる神、ヤハウェをあがめていると言っていたのですが、その中身は神の定めによるものではなく、人間的な要素で行っていたのです。ゆえに、主をあがめると言いながら、内実は偶像礼拝だったのです。これを、列王記には「ヤロブアムの道」と書かれています。アッシリヤに滅ぼされるまで、イスラエルの歴代の王はその道から離れることは決してありませんでした。

罪というのは、元々の意味は「的を外れている」のですが、神を知っているというところでこのように的を外していたので、生活の全てに歪みが出て来ました。「のろいと、欺きと、人殺しと、盗みと、姦通がはびこり、流血に流血」であります。多くの人は、これらのことを直そうと世直しをしようしますが、根本には主に対する立ち返りがなければ、直りようがありません。そして 3 節ですが、前回の学びにも出て来ましたが、人と神との関係が悪化すれば、地上の被造物も嘆き悲しみます。

アダムが造られた時に彼に生きている物の支配が任されたのですが、彼が罪を犯したので地は呪われたものとなりました。

4:4 だれもとがめてはならない。だれも責めてはならない。しかし祭司よ。わたしはあなたをなじる。
4:5 あなたは昼つまずき、預言者もまた、あなたとともに夜つまずく。わたしはあなたの母を滅ぼす。
4:6 わたしの民は知識がないので滅ぼされる。あなたが知識を退けたので、わたしはあなたを退けて、わたしの祭司としない。あなたは神のおしえを忘れたので、わたしもまた、あなたの子らを忘れよう。

預言は、祭司に対する非難になっています。なぜなら、祭司こそが主の教え、トーラを民に教えて、民を神に導く務めを担っていたからです。祭司自身が、神によってではなく、人によって選ばれていたであり、そこに神の賜物が与えられるはずもなく、それで主の言葉ではない自分勝手な教えをしていたのです。そして預言者も、その教えに基づいて預言するので、初めから誤った教えに基づいているのですから、預言も間違っただけのものとなっています。イエス様は、それゆえ律法学者に対する厳しい裁きを宣言されました。「マタイ 23:2-3 律法学者、パリサイ人たちは、モーセの座を占めています。ですから、彼らがあなたがたに言うことはみな、行ない、守りなさい。けれども、彼らの行ないをまねてはいけません。彼らは言うことは言うが、実行しないからです。」ヤコブも言いました、「3:1 私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。」

4:7 彼らはふえるにしたがって、ますます、わたしに罪を犯した。わたしは彼らの栄光を恥に変える。

ここの「ふえる」というのは、繁栄するということです。繁栄というのが、主から来ているもの、主の憐れみから来ているものなのに、繁栄すればするほど、主に対して罪を犯しました。偶像礼拝や、真実や誠実に反する行ないをしていったということです。これは、ちょうど親に反抗する子との関係にもあるようなジレンマ、葛藤です。子に良くしてあげたいと願う親の愛に気づかずに、そのしてあげることを使って、ますます親に反抗するというジレンマです。主が良くしてくださっていることに対して、神に対して感謝のいけにえを捧げない時に、私たちの心は頑なになり、もっと欲しい、もっと欲しいと飽くことがなくなります。「詩篇 50:14 感謝のいけにえを神にささげよ。あなたの誓いをいと高き方に果たせ。」

そして、人が誤った教え「繁栄の神学」とでも呼びましようか、神の名によって成功を求めるならば、どこかでポロが出るようになります。自分たちが築いてきたものが自滅するようになります。しかしそれは、主の裁きの現れなのです。「わたしは彼らの栄光を恥に変える。」と言われます。

4:8 彼らはわたしの民の罪を食いものにし、彼らの咎に望みをかけている。4:9 だから、民も祭司も同じようになる。わたしはその行ないに報い、そのわざの仕返しをする。4:10 彼らは食べても、満たされず、姦淫しても、ふえることはない。彼らは主を捨てて、姦淫を続けるからだ。

祭司たちが、民の罪や咎に望みをかけています。これは、病人が増えれば病院が儲かるのと同じ構図です。病ではないものも病なのだという、要らない薬を何度も処方する、病気にかからないようにする方法は敢えて教えない、などの弊害があるでしょう。これを霊的に祭司たちが行なっていました。人々が罪を犯すことによって、自分たちのところにいけにえを携えてくるようになります。そして祭司には、その捧げ物が増えていきます。それで、罪ではないものを罪であると言います。そして捧げる必要もないものを、捧げなければいけないと言います。そして、神の道に歩むことを教えなければいけないのに、それを敢えて教えません。そうした、お金が儲かるシステムの中に彼らは入ってしまったのです。ですから、彼らがいくら「祭司」と呼ばれても、単なる人と何ら変わりません。その職務に見合う働きをしていない者たちがその職位に就いてはいけないのです。

そして、人の欲求を満たすことが目的と化してしまった礼拝は、留まることを知りません。食べても満たされず、姦淫しても増えることがないというのは、主にある真の満足が得られないのです。

2B 姦淫の霊 11-19

4:11 ぶどう酒と新しいぶどう酒は思慮を失わせる。

彼らの偶像礼拝の背後には、このように酔いしれた状態があったようです。新しいぶどう酒に恵まれていたのですが、それで主に感謝するのではなく、バアルを拝んでいたことを前回学びました。聖書は、酒を飲んではいけないとは教えていませんが、「エペソ5:18 また、酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。」と教えています。

4:12 わたしの民は木に伺いを立て、その杖は彼らに事を告げる。これは、姦淫の霊が彼らを迷わせ、彼らが自分たちの神を見捨てて姦淫をしたからだ。4:13 彼らは山々の頂でいけにえをささげ、丘の上、また、樅の木、ポプラ、テレビンの木の下で香をたく。その木陰がこちよいらだ。それゆえ、あなたがたの娘は姦淫をし、あなたがたの嫁は姦通をする。

イスラエル人たちは、カナン人の慣わしである、木を拝み、そして杖がどこに倒れるかによって判断する棒占いを行なっていました。そして、その儀式の場は、山頂のいけにえ、丘の上、そして木の下で行われていました。神は、それを「姦淫の霊に迷わされている」と言われます。姦淫の霊とは何なのでしょう？ 11 節に、お酒の問題と相通じます。お酒を飲むと、自分の神経中枢が麻痺してきて、自分が何をしているか分からなくなっていく。この識別力がなくなっている状態が「姦淫の霊に迷わされている」ことです。姦淫の罪を犯す人は、この状態に陥ります。自分が何を

しているのか分からなくなります。ちょうどお酒に酔った状態、麻薬で幻想を見ているような状態、あるいは魔術にかけられたような状態に陥っているのです。後で「自分はいったい、何をやってたんだ？」と気づくことができたなら、自分が行なっていることがいかに間違いめいていて、愚かで、恥ずかしいことかを知ることができるのですが、それに気づくのは容易いことではありません。

4:14 わたしは、あなたがたの娘が姦淫をしても罰しない。また、あなたがたの嫁が姦通をしても罰しない。それは男たちが遊女とともに離れ去り、神殿娼婦とともにいけにえをささげているからだ。悟りのない民は踏みつけられる。

これらカナン人の慣わしは、霊的な姦淫である偶像礼拝のみならず、性的な倒錯も絡んでいました。その神々に仕える女祭司がいるのですが、はっきり言えばそれは売春婦であります。しかし、主は女たちがそのようになっているのを責めておられません。家の頭である男たちが遊女の所に行って、神殿娼婦と共にいけにえを捧げているからです。

4:15 イスラエルよ。あなたは姦淫をしても、ユダに罪を犯させてはならない。ギルガルに行つてはならない。ベテ・アベンに上つてはならない。「主は生きておられる。」と言って誓つてはならない。

主は、イスラエルの偶像礼拝がユダにまで伝染させてはならない、と呼びかけておられます。ギルガルは、死海の上、ヨルダン川のそばにある町で、ベテルはエルサレムの北にある町です。どちらも、ベニヤミン族の領地との境にあります。そこに行って彼らは偶像礼拝を行なっていました。濃厚な偶像礼拝でした。そしてユダにもそれが入っていこうとしていたのです。しかも、「主は生きておられる」と言って、主の名を呼び求めながらそれらのことを行なっていたのです。

主はここに、ご自身の心の痛みを、含みをもたせて語っておられます。「ギルガル」と言えば、ヨシュアたちがヨルダン川を渡って、割礼を受けて、自分自身を聖別した記念の場です。それが偶像礼拝の場となっていました。そして「ベテ・アベン」はベテルと同じです。ベテルは「神の家」という意味ですが、ベテ・アベンは、「悪の家」あるいは「偶像の家」という意味です。ヤコブが天のはしごの夢を見た、神との出会いの場であるのが、金の子牛を拝む偶像礼拝の場となっていました。主の御霊が生きておられる場が、命を失い、他の霊に仕える場となってしまったということです。

4:16 まことに、イスラエルはかたくなな雌牛のようにかたくなだ。しかし今、主は、彼らを広い所にいる子羊のように養う。4:17 エフライムは偶像に、くみしている。そのなすにまかせよ。4:18 彼らは飲酒にふけり、淫行を重ね、彼らのみだらなふるまいで恥を愛した。4:19 風はその翼で彼らを吹き飛ばす。彼らは自分たちの祭壇のために恥を見る。

神がイスラエルに対して呼びかけても、心を頑なにさせているイスラエルの姿を見せています。

16 節の子羊のところですが、これは新共同訳のほうがよいでしょう。「どうして主は、彼らを小羊のように／広い野で養われるだろうか。」となっています。主は、ご自分の声を聞く小羊のように養われるはずなのに、彼らは言うことを聞かない雌牛のように強情になっているということです。自我と読んだらよいでしょうか、13 節で「その木陰がこちよいからだ」とありましたが、主に仕えていると言いながらカナン人の慣わしも取り入れている、云わば「良いとこ取り」の信仰はその人に心地よさを与え、依存性をもたせます。アルコール依存症になった人が、どんなにやめなさいと言われても、絶対に手放さないのと似ています。しかし、主が与える自由とは、「主だけを神とする自由」であり、聖められるところにある自由と喜びと平安です。

彼らが頑ななので、主は彼らを引き戻すことはできず、なすがままにするしかありません。そして、18 節の「風はその翼で彼らを吹き飛ばす」ですが、風は霊とも訳すことができます。姦淫の霊が風のように吹くということです。これは比喻であり、彼らがその土地から吹き飛ばされる、アッシリヤに捕われの身になるということです。そして祭壇で恥を見るとありますが、彼らが、その祭壇のところで殺され、自分の死体が祭壇に置かれるということです。ユダの王ヨシヤが、墓から骨を出してきて、それらの祭壇を汚した、とあります(2列王 23 章)。

2A 主の裁き 5

1B 己の不義による躓き 1-7

5:1 祭司たちよ。これを聞け。イスラエルの家よ。心せよ。王の家よ。耳を傾けよ。あなたがたにさばきが下る。あなたがたはミツパでわなとなり、タボルの上に張られた網となったからだ。5:2 曲がった者たちは落とし穴を深くした。わたしは彼らをことごとく懲らしめる。

4 章で、イスラエルが行なっていることを明らかにされた後で、イスラエルに対して裁きを宣言しておられます。「ミツパ」は、かつて預言者サムエルが士師としてイスラエルを裁いたところです。ペリシテ人との戦いにおいて、主に叫んで救いを得たところです。そして「タボル」は、イスラエル平原において、士師であるデボラとバラクがカナン人に攻め込む出発点でありました。主が、イスラエルの民のためにカナン人やペリシテ人に対して戦ってくださったところで、彼らがまさにカナン人の慣わしに従っていたのですから、彼ら自身がその裁きの対象となってしまいます。そして、主はここで、「罨」「網」「落とし穴」と言われています。自分が行なったことによって、自分自身が倒れるということです。

5:3 わたしはエフライムを知っていた。イスラエルはわたしに隠されていなかった。しかし、エフライムよ、今、あなたは姦淫をし、イスラエルは身を汚してしまった。5:4 彼らは自分のわざを捨てて神に帰ろうとしない。姦淫の霊が彼らのうちにあつて、彼らは主を知らないからだ。5:5 イスラエルの高慢はその顔に現われている。イスラエルとエフライムは、おのれの不義につまずき、ユダもまた彼らとともにつまずく。

主はエフライム、すなわち北イスラエルを知っておられました。けれども、イスラエル自身は主を知りませんでした。ホセアが、ゴメルを娶っていて彼女を知っていましたが、彼女のほうは他の所のところに行き、彼を知りませんでした。使徒パウロが、恵みによって神を知っていた彼らが、律法に戻っていったことを嘆いてこう言いました。「ガラテヤ 4:9 ところが、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうしてあの無力、無価値の幼稚な教えに逆戻りして、再び新たにその奴隷になろうとするのですか。」私たちがもしかしたら、神を親しく知らないかもしれませぬ。しかし、主は私たちを、隅から隅まで知っておられて、なおのこと愛しておられます。その神の深い愛、広い愛、高い愛を、キリストにあってどこまで知ることができるのか？というのが、使徒パウロの祈りでありました(エペソ3:18-19)。そして、ここで言っている「高慢」は、神の名を呼び求めればよいのに、神に抛り頼めばよいのに、「自分でやっています」という強情さです。自分の内に命があるという思い上がりです。

5:6 彼らは羊の群れ、牛の群れを連れて行き、主を尋ね求めるが、見つけることはない。主は彼らを離れ去ったのだ。5:7 彼らは主を裏切り、他国の男の子を生んだ。今や、新月が彼らとその地所を食い尽くす。

主を尋ね求める、といっても、それは主の名を唱えていても、全く意味をなさない、主を知らないのに名前だけ唱えている状態です。そして彼らから生まれる子孫は、全く神を知らない民となってしまっています。新月は守られても、カナン人の風習と混淆した儀式となってしまっています。

2B アッシリヤの恐怖 8-15

5:8 ギブアで角笛を吹き、ラマでラッパを鳴らし、ベテ・アベンでときの声をあげよ。ベニヤミンよ。警戒せよ。5:9 エフライムは懲らしめの日に、恐怖となる。わたしはイスラエルの部族に、確かに起こることを知らせる。5:10 ユダの首長たちは地境を移す者ようになった。わたしは彼らの上に激しい怒りを水のように注ぐ。

8 節から、ユダをも含めた神の警告になっています。今、イスラエルを攻めて来るアッシリヤがおり、そしてその脅威がユダにも及ぶ姿を示しています。ベニヤミンが、北イスラエルに直に接しているからです。ギブアとラマは、ベニヤミン領です。ベテ・アベンはイスラエルとユダとの境です。「地境を移す」というのは、主に与えられた割り当てを変えてしまうことであり、つまり持ち分を変え裏切ることを生みしています。ユダ王アハズのことを思い出します。イスラエルとアラムが合同で、ユダを攻め入ろうとした時に、主が助けてくださるはずだったのに、アッシリヤに助けを求めました。それでアラムもイスラエルも攻め取られます。アッシリヤそれだけに留まらず、ユダにも虐げを始めていきました。

5:11 エフライムはしいたげられ、さばかれて打ち碎かれる。彼はあえてむなしいものを慕って行っ

たからだ。5:12 わたしは、エフライムには、しみのように、ユダの家には、腐れのようになる。5:13 エフライムがおのれの病を見、ユダがおのれのはれものを見たとき、エフライムはアッシリヤに行き、大王に人を遣わした。しかし、彼はあなたがたをいやすことができず、あなたがたのはれものを直せない。5:14 わたしは、エフライムには、獅子のように、ユダの家には、若い獅子のようになるからだ。このわたしが引き裂いて去る。わたしがかすめ去るが、だれも助け出す者はいない。

北イスラエルは、アッシリヤによって浸食されます。それが、「しみ」と表現されていますが、レビ記 13-14 章にらい病の教えがあり、らい病が皮膚の下に潜みながらその症状を進行させていくものでした。彼らはそのようになっていました。ユダにも、腫れ物として広がっていきます。そして、「アッシリヤに行き、大王に人を遣わした。」とありますが、ヤロブアム二世の後の後に出て来たメナヘムというイスラエルの王が、攻めてきたアッシリヤの王に銀一千タラントを与えた、とあります。アッシリヤからの援助によって王国を強めるためだとありますが、もちろんその逆の結果に陥りました。吸い取られるだけ吸い取って、後でアッシリヤは弱くなったイスラエルを攻め取ります。

ここで主ご自身が、「獅子のように、..若い獅子のようになるから」と言われています。これらのことを行なわれたのは、まさしく主ご自身なのだよということです。アッシリヤに如何に対抗するかということが、彼らの最大の関心事だったのですが、そうではなく、もっともっと奥深いところで、彼らが主を求めることができるように、神がご自分の主権でそのようにされたのだということです。私たちに問題が押し寄せて、何かのせいである、誰かのせいであると被害意識のままでいれば、解決はありません。それらの全てに主がおられることを受け入れて、それで主の名を呼び求めなければ、解決はないのです。

5:15 彼らが自分の罪を認め、わたしの顔を慕い求めるまで、わたしはわたしの所に戻っていよう。彼らは苦しみながら、わたしを捜し求めよう。

「わたしはわたしの所に戻っていよう」とは、天に戻るということです。主があらゆる手を使って、彼らのご自身に立ち返ることを願っておられました。ところが、彼らに近づけば近づくほど、ますます頑なになり、偶像礼拝に突き進むので、主は何もしないでいることしかできなくなりました。そのことによって、彼らが苦しみます。しかし、その苦しみから、主を探し求めるようになることを願っておられます。主の手には、このような荒治療による癒しがあります。「何もしない」というところにある、愛があります。何かをすることが、そのまま愛だとは限らないことがあります。

そして、「わたしを捜し求めよう」という言葉ですが、これは、「切に求める」(詩篇 63:1)とも訳される言葉です。詩篇 63 篇では、荒野において、水がなく衰え果てようとしている中で水を慕い求めるように、主を切に求めるという文脈で使われています。私たちが主を求めるという時に、まだ自分というのを保ったまま、自分で自分のことをできるというものを持ったまま求めていやしないで

しょうか？それをヤコブは、「疑って、二心のままで願う」と言っています(1:6,8)。

3A 朝霧のような誠実 6

1B 三日目の立ち上がり 1-3

6:1 「さあ、主に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、いやし、私たちを打ったが、また、包んでくださるからだ。6:2 主は二日の後、私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる。私たちは、御前に生きるのだ。6:3 私たちは、知ろう。主を知ることを切に追い求めよう。主は暁の光のように、確かに現われ、大雨のように、私たちのところに来、後の雨のように、地を潤される。」

立ち返りの声です。ここだけを読めば、とても素晴らしい立ち返り、悔い改めの言葉です。もし 3 節までしか読まなければ、そのまま受け入れて値するものです。4 節以降で、主がこの祈りを聞き入れていないことが分かります。けれども、ここではその言葉だけを辿ってみましょう。先ほど、主が獅子のように、エフライムとユダを引き裂くと言われましたが、彼らはそれが癒されるためであったと言っています。主が懲らしめを与えられる時、それは癒されるためであることは、ヘブル書 12 章 13 節に書いてあります。「また、あなたがたの足のためには、まっすぐな道を作りなさい。足なえの人も関節をはずすことのないため、いやむしろ、いやされるためです。」そして、自分たちが打たれたのも、包まれるためであると言われます。私たちが悔い改める時に、そのような主の慈愛に触れて悔い改めることができます。それから、三日目に生き返るという言葉を使っています。まさに、主ご自身の復活を預言しているかのような表現です。主は死にましたが、三日後に甦られました。私たちが主から懲らしめを受ける時も、それはいつまでも続くことではなく、永続的な命と平安を得るためのものです。そして、主が死なれたけれども甦られたように、私たちが主にあって死んでも、必ず甦ります。

そして、「主を知ることを切に追い求めよう。」と言っています。これが、主が願って来られる最も大事なことです。午前礼拝で学びましたね。そうすれば、主が光のように現れて、また雨のように降り地を潤すとありますが、光もまた大雨も、私たちを癒すものです。太陽の光を浴びて癒され、また恵みの雨を受けて癒されます。

2B 誠実なきいけにえ 4-11

この言葉だけであれば、これこそ模範的な悔い改めの言葉です。ところが、主は彼らの心を読み取っておられました。主は、私たちの心のこと、隠れていることをことごとく知っておられます。

6:4 エフライムよ。わたしはあなたに何をしようか。ユダよ。わたしはあなたに何をしようか。あなたがたの誠実は朝もやのようだ。朝早く消え去る露のようだ。6:5 それゆえ、わたしは預言者たちによって、彼らを切り倒し、わたしの口のこぼれで彼らを殺す。わたしのさばきは光のように現われる。

6:6 わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない。全焼のいけにえより、むしろ神を知ることを喜ぶ。

主は、イスラエルとユダが美しい、立ち返りの言葉を語ったので、何と言えよいかと思いがぐねておられます。そして、「あなたがたの誠実は朝もやのようだ」と言われます。そう、彼らは悔い改めの言葉そのものは美しく発することができましたが、そこに誠実さ、ヘセドが薄かったのです。イエス様が、パリサイ人シモンの家に行かれた時のことを思います。不道德の女がイエス様の足を涙で濡らし、口づけし、香油を塗りました。このことでイエス様はシモンに、「この女の多くの罪は赦されています。というのは、彼女はよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。(ルカ 7:47)」と言われます。主の誠実に触れている者は、その誠実に応答している者は、主への誠実も本物となります。けれども、主の誠実に触れていない者は、どんなに悔い改めの言葉がきれいであっても、朝靄のようであり、露のようなものだということです。

それで主は、預言者たちによって彼らを切り倒すと言われます。これは、モーセやサムエルの預言の言葉のことでしょう。モーセは申命記 28 章で、イスラエルの不従順による神の呪いの言葉が宣言され、「申命記 28:49 主は、遠く地の果てから、わしが飛びかかるように、一つの国民にあなたを襲わせる。その話すことばがあなたにはわからない国民である。」アッシリヤによって襲われる預言をしました。またサムエルは、午前礼拝で引用したように、サウルに対して、主に聞き従うことが、全焼のいけにえにまさるということを話しました。主を知らない人、その誠実と真実を知らない人は、いけにえが多くなります。自分が何をするかということが、多くなります。神中心ではなく、人間中心、神の熱心が事をなすのではなく、人々の熱心が強調されます。

6:7 ところが、彼らはアダムのように契約を破り、その時わたしを裏切った。6:8 ギルアデは不法を行なう者の町、血の足跡に満ちている。6:9 盗賊が人を待ち伏せするように、祭司たちは仲間を組み、シェケムへの道で人を殺し、彼らは実にみだらなことをする。6:10 イスラエルの家にわたしは恐るべきことを見た。エフライムは姦淫をし、イスラエルは身を汚している。

午前礼拝で話したように、アダムこそが、主の御声に聴き従わず、自分の行ないでその負い目を償おうとした人物です。そこにある高ぶり、自我というものをそのままにしているのであれば、どんなに宗教的に犠牲が多くなっても、自分の死んだ行ないに対して何ら効力を持たないのです。

ギルアデは、ヨルダン川東岸の地域です。ヤボク川の北からバシヤンまでの間の地域ですが、ここはおそらく「ラモテ・ギルアデ」という町のことを指しているのでしょう。そしてシェケムはもちろん、ヨルダン川西岸にあり、アブラハムがカナンの地に入って、初めて祭壇を造って主を礼拝したところです。この二つの町は、ヨシュア記 20 章によると「逃れの町」に指定されていたところです。主は、殺意がなく事故によって人を殺してしまった時に、親族による復讐を免れるために、レビ人の

町のうち六つを「逃れの町」として定めてくださいました。ヨルダン川の西に、北部・中央・南部に一
つずつ、そして東側にも三つの町があります。全イスラエルが、自分が一番近いところに逃げ込む
ことができるようにするためです。ところが、その命を守るはずの町が、反対に祭司たちが命を奪
い取る町になってしまったという、恐るべきことを行っていたのです。

6:11 ユダよ。わたしが、わたしの民の捕われ人を帰らせるとき、あなたのためにも刈り入れが定
まっている。

この「捕われ人を帰らせる」というのは、北イスラエルが捕虜として連れて行ったユダの人々を
帰してあげた時のことを話しているものと思われます。ユダの王アハズの時のことです。シリアと
イスラエルがユダに対して戦って、女、子供たちをなんと十二万人もサマリヤに連れてきました(2
歴代 28:8)。それで預言者オデデが、「とりこを返しなさい。主の燃える怒りがあなたがたに臨むか
らです(11 節)」と警告しました。それで彼らは、丁重に彼らを取り扱いエリコに連れて行った、とあ
ります。けれどもこのような神の憐れみを見たアハズ王は、これを神の憐れみと受け入れません
でした。それでアッシリヤに、シリアとイスラエルを倒すよう要請したのです。そこで、「刈り入れ」が
始まります。刈り入れとは、ここでは神の裁きのことです(黙示 14 章参照)。

4A 陰謀の愚かさ 7

1B 謀略を重ねる家臣 1-7

7:1 わたしがイスラエルをいやすとき、エフライムの不義と、サマリヤの悪とは、あらわにされる。
彼らは偽りを行ない、盗人が押し入り、外では略奪隊が襲うからだ。7:2 しかし、彼らは心に言い
聞かせない、わたしが彼らのすべての悪を覚えていることを。今、彼らのわざは彼らを取り巻いて、
わたしの前にある。

神が、ご自分の懲らしめをためらって行なっていることがここからよく分かります。主がイスラ
エルを癒した、とあります。ヤロブアム二世の時代に、主が彼らが外国から虐げられているのを忍び
なくて、それで憐れみ、その国を栄えさせました。つまり、癒されたのです。ところが、そのことによ
って彼らの悪が露わにされました。ヤロブアム二世の死後は、謀略と暗殺の連続です。五人の王
が次々と家臣から殺され、その家臣が王となるという国情でした。その間に、国がどんどん弱くな
り、アッシリヤに浸食され、侵略されたのです。それを、主が癒されたのに、偽り、盗人、略奪隊と
表現しているのです。

7:3 彼らは悪を行なって王を喜ばせ、偽りごとを言って首長たちを喜ばせる。7:4 彼らはみな姦通
する者だ。彼らは燃えるかまどのようだ。彼らはパン焼きであって、練り粉をこねてから、それがふ
くれるまで、火をおこすのをやめている。7:5 われわれの王の日に、首長たちは酒の熱に病み、
王はあざける者たちと手を握る。7:6 彼らは陰謀をもって近づく。彼らの心はかまどのようで、その

怒りは夜通しくすぶり、朝になると、燃える火のように燃える。7:7 彼らはみな、かまどのように熱くなって、自分たちのさばきつかさを焼き尽くす。その王たちもみな倒れる。彼らのうちだれひとり、わたしを呼び求める者はいない。

家臣が、自分の主君、王に対して暗殺を企んでいる姿を、パン焼きに喩えています。パン粉を練って、それをかまどに入れたら、膨れるまで火を起こすのをやめています。つまり、時が来るのを待っているのです。それまでの間、陰謀をもって近づいています。そして時が来たら王を打ち殺しています。彼らの中に、神の知識がありませんでした。神に呼び求めるならば、国を救われるかもしれないという思いはありませんでした。心は謀反で満ちていたのです。

ダビデが、謀反によって彼に手柄を立てたと思って近づいてきたものを殺したのを覚えていますか？サウルの子イシュ・ボシェテが寝ている時に、レカブという男とバアナという男が近づいて、彼の首を斬りました。そしてそれをダビデに持ってきて、見せました。ダビデは、喜んだでしょうか？いいえ、その血の責任を負わせるために彼らを処刑しました。謀略というものを、彼は非常に憎んだのです。自分が王となっているのは、神があらゆる苦難から救い出されたからであり、人が謀略で殺すわけではありません。

2B 主から逃げ去る鳥 8-16

7:8 エフライムは国々の民の中に入り混じり、エフライムは生焼けのパン菓子となる。7:9 他国人が彼の力を食い尽くすが、彼はそれに気づかない。しらがが生えても、彼はそれに気づかない。7:10 イスラエルの高慢はその顔に現われ、彼らは、彼らの神、主に立ち返らず、こうなっても、主を尋ね求めない。

主は、彼らがパン焼きのように、じっくり陰謀を抱いて、暗殺したのに対して、彼らがいかに弱まっているかを、「生焼けのパン」というように言って、当てこすりしました。彼らは愚かだったのです。自分たちことについては非常に狡猾に動いたのに、周りの情勢については無頓着でした。私たちも、主を恐れていなければ、自分では見えているつもりで実は見えていなければいけないものまでが、見えなくされています。そして、主が手を差し伸ばしても、かえって反発している姿があります。「彼らは、彼らの神、主に立ち返らず、こうなっても、主を尋ね求めない」とあります。

7:11 エフライムは、愚かで思慮のない鳩のようになった。彼らはエジプトを呼び立て、アッシリヤへ行く。7:12 彼らが行くとき、わたしは彼らの上に網を張り、空の鳥のように彼らを引き落とし、その群れが騒々しくなるとき、わたしはこれを懲らす。

自分たちが弱くなっていったので、今度は、南はエジプト、そして北はアッシリヤの大国によりすがろうとします。けれどももちろん、彼らは敵であって決して味方ではありません。それを主は、「愚

かで思慮のない鳩」に喩えておられます。自ら罫にひっかかる姿です。

7:13 ああ、彼らは。彼らはわたしから逃げ去ったからだ。彼らは踏みにじられよ。彼らはわたしにそむいたからだ。わたしは彼らを贖おうとするが彼らはわたしにまやかしを言う。7:14 彼らはわたしに向かって心から叫ばず、ただ、床の上で泣きわめく。彼らは、穀物と新しいぶどう酒のためには集まって来るが、わたしからは離れ去る。7:15 わたしが訓戒し、わたしが彼らの腕を強くしたのに、彼らはわたしに対して悪事をたくらむ。

繰り返し、繰り返し、主が手を伸ばしておられるけれども、それをその度に拒んでいるイスラエルの姿がありますね。「わたしは彼らを贖おうとするが彼らはわたしにまやかしを言う」「穀物と新しいぶどう酒のためには集まって来るが、わたしからは離れ去る」「わたしが訓戒し、わたしが彼らの腕を強くしたのに、彼らはわたしに対して悪事をたくらむ」ありのままの自分を神の前にそのまま持つて行くことをせず、そのまま心から神に叫ぶことをせず、他のあらゆることを行なおうとします。10 節に、「イスラエルの高慢はその顔に現われ」ているとあります。何が高慢なのでしょう？そう、主の愛の向き合わないということです。主がこれだけ真実と誠実を尽くしておられるのに、これだけ関心がおありなのに、立ち止まって、そのことを顧みないということです。そして、自分でやっていけます、という独立心をもって動いています。これこそが高慢です。

7:16 彼らはむなしいものに立ち返る。彼らはたるんだ弓のようだ。彼らの首長たちは、神をののしったために、剣に倒れる。これはエジプトの国であざけりとなる。

主に立ち返るのではなく、中身のないもの、虚しいものに立ち返っています。それで、役に立たない者となったということで、「たるんだ弓」のようであると言います。イエス様も同じ事をいわれました、「マタイ 5:13 もし塩を塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。」そして、首長たちが神を罵るといっています。自分たちが窮地に立たされて、「なぜ、神はこんなひどいことをするのか。」と、神を普段は無視しているくせに、苦境になった時にへりくだらないで、むしろ神を罵ります。

そして最後は、「エジプトの国であざけりとなる」とあります。エジプトに頼ったけれども、助けにならず、アッシリヤに捕え移されていくのです。そしてこれは霊的意味も含まれるでしょう。自分たちを虐げていたエジプトから、神の民となってそこから脱出したのに、また同じ元の木阿弥ではないかと嘲られているのです。私たちは、注意しないといけませんね。神の慈しみを忘れないようにする。神を礼拝する。自分がしていることで忙しくならない。感謝のいけにえを捧げます。「ヘブル 3:13-14「きょう。」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、私たちは、キリストにあずかる者となるのです。」